

『十六夜日記』に言及される『うたたね』

——『更級日記』の構成との関連について——

大庭 大

序 阿仏尼の『うたたね』について

『うたたね』は、『新古今和歌集』・『新勅撰和歌集』の撰者となった藤原定家の息である藤原為家の後家、阿仏尼の作である『十六夜日記』の中盤、鎌倉下向の旅を語る「路次の記（または「旅の記）」において、次に引用する三ヶ所にわたって言及されることから、同じく阿仏尼の作と推測されており、彼女の若き日の失恋と遠江下向を題材にした散文作品と捉えられている。

また『十六夜日記』本文は、福田秀一校注『中世日記紀行集』（新日本古典文学大系51 岩波書店 1990）より引用し、独自に小見出しを設けて抜粋した場面を簡潔に解説していく。

1 「廿一日」…三河路（八橋く宮路山）の情景

廿一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山もと遠き原野を分行く。昼つ方になりて、紅葉いと多き山に向かひて行。風につれなき所く、朽葉に染め変へてけり。常盤

木どもも立ちまじりて、青地の錦を見る心地す。人に問へば、宮路の山と言ふ。

三三 時雨れけり染むる千入の果ては又紅葉の錦色かへるまで

此山までは昔見し心地するに、比さへ変はらねば、

三四 待ちけりな昔も越えし宮路山同じ時雨のめぐりあふ世を

まず、引用1で「宮路山」は「昔見し心地する」山と語られる。この山は『うたたね』の本文に見えない山であるものの、「比さへ変はら」ないという、時期の一致を根拠として、『うたたね』で語られる経験を指すと解釈される事が多い。²とすると、この箇所は『十六夜日記』による、旅した時期の類似に注目した、ある種の語り直しと言えるだろう。³

2 「廿二日」…遠江路（引馬の宿・浜松）の情景

今宵は引馬の宿といふ所にとゞまる。此所の大方の名は、浜松とぞ言ひし。親しといひしばかりの人／＼なども住む所なり。住み来し人の面影もさまざま、思ひ出られて、又めぐりありて見つる命の程も、返々^{かたがたすすむれば}哀なり。

四一 浜松の変らぬ影を尋ね来て見し人なみに昔をぞ問ふ其世に見し、人の子孫など呼び出でてあひしらふ。

引用2も、「宮路山」に続く言及の箇所である。ここでは「浜松」で親しい人々との交流があったと語られており、「宮路山」と同様、『うたたね』では一切語られていない事を補足するような語りと言える。しかし、遠江下向の際に訪れた場所と推測できるため、引用1に比べて『うたたね』との関連性が強い。

3 「廿六日」…駿河路（富士）の情景

富士の山を見れば、煙も立たず。昔、父の朝臣に誘はれて、「いかに鳴海の浦なれば」など詠みし比、遠江国までは見しかば、富士の煙の末も朝夕確かに見えし物を、いつの年よりか絶しと問へば、さだかに答ふる人だになし。

最後に引き合いに出される箇所は、右に挙げた引用3となる。この場面の「いかに鳴海の浦なれば」は、『うたたね』において阿仏尼が詠んだ歌（後述する『続古今和歌集』入集の和歌）の二、三句目と重なる。

引用3の「父の誘」いも『うたたね』で語られる「女」の状況に酷似しているなど、これら「路次の記」の三ヶ所に見られる『うたたね』への言及からは、『十六夜日記』の作中主体である「女」が、『うたたね』で語られる「女」の後の姿であると規定する特徴を考えられる。

為家の遺言を受けて鎌倉へ下る「女」を語る『十六夜日記』が、『うたたね』での出来事へ言及する事によつて、『うたたね』は、鎌倉下向を目的とする『十六夜日記』の前日譚の作品として機能するのではないだろうか。

本論は、『うたたね』を『十六夜日記』の前日譚として捉えた場合、『うたたね』を踏まえる『十六夜日記』の戦略の考察を目指す。具体的な方法として、『うたたね』の作品論から『十六夜日記』の特徴を考え直し、そこから阿仏尼の散文二作の持つ関連性に、『更級日記』に見られる構成との関わりが存在する可能性について検証するものである。

『うたたね』の研究史を紹介する前に、ここで一度、作品の概要を簡単に記しておこう。『うたたね』は、作中主体の「女」が、恋人である貴公子と疎遠になりつつある状態から語られ始める。「女」の心情を語る点で、女流日記的であると言えるが、具体的な日付の記述や、季節の変遷の記述が希薄であり、さらには『源氏物語』を踏まえた表現も多い作品でもある。

恋人との疎遠な状態を憂え、太秦へ参詣しても、物思いが深まっていくな「女」は思い切つて難髪し、西山にある尼寺へ移り住

む。しかし、そこでも恋人が忘れられない「女」は、恋人に文を送ってしまふ。

その返事は実にそっけない内容だった。「女」は病を得たため、尼寺より退出し、東山に近い愛宕へ転居する。だが、その地で恋人の車とのすれ違いが起き、物思ひは晴れないのだった。

回復の後、元の邸に戻った「女」は、遠江から帰京していた養父の誘いを受け、今度は遠江国への下向を決意する。下っていく東海道的情景と、下向先での滞在によつて、一定の安らぎが得られたのも束の間、「女」は乳母の病状が悪化したと知らされる。

彼女は急いで帰京するも、乳母の病氣は深刻でなかったと明かされる。そこで、移り気な自己の心理と、自身の行く末を案じながら、『後撰和歌集』に入集した歌人・中務の歌（後述、引用11）を引用し、恋人への不満を漂わせる形で、本文は結ばれる。

このように「女」の失恋を語る『うたたね』であるが、その研究史については、大塚敏久氏の「『うたたね』の世界への窓」⁴が詳しい。大塚氏によれば、写本の奥書などから、長らく『うたたね』は、阿仏尼（または『続古今集』での女房名、安嘉門右衛門佐とも）の作であるとされてきたが、大正六年（1917）吉川秀雄氏は『うたたね』について、『十六夜日記』の「簡健明断」な文体と違つて「艶麗にして曲折の多い文」であることと、『夫木和歌抄』に一首も取られていないことから後人による偽作説を出した。⁵

対して、池田亀鑑氏は『うたたね』について「何人の先であるか明かでない」としながらも、『十六夜日記』「路次の記」におけ

る「宮路山」、「浜松」、「鳴海潟と富士の煙」の三ヶ所の記事の内容が『うたたね』で語られる内容と合致し、『うたたね』作中の歌が、『続古今和歌集』に「安嘉門院右衛門佐」の名で入集している事から、『うたたね』は『十六夜日記』と同様に阿仏尼の作、または「妹の尼君」の作と見るのが穩当であると論じた。⁶

比留間喬介氏も同じく、『続古今集』入集歌の詞書を「阿佛身上の事實」であり、初句の相違についても、「歌も續古今のままを引用すべき」で、「偽作の態度としては考へられない」として、同説を補強しており、次田香澄氏も、比留間氏の説に賛同し、「いと」と「心細し」という単語が頻繁に使用される点が『十六夜日記』と似通うとしている。⁸

要するに、『十六夜日記』と、『うたたね』の關係性を考える上で、両者の文体の相違が問題となり得るのである。しかし、池田氏が両作品を同一作者の手に依るものとする根拠として、先に挙げた『十六夜日記』の三箇所、で、『うたたね』における出来事、または遠江下向と同時期の出来事への言及を行う性格がある。これらを見過ぐすことはできないだろう。

より詳細に先の引用1～3が阿仏尼作であるという根拠の理由を紹介しておく。まず「廿一日」の「宮路の山」は『うたたね』には見えない地名であるため後人の追加とも考えられなくもないが、それでも「引馬の宿」では以前交流のあった「人の子孫」との再会や、「富士」の情景によつて『続古今集』に入集した自身の和歌「さても我いかなるみのうらなればおもふかたにはとほざかるらん」⁹を想起するのである。こうした『うたたね』

での経験の一部を語り直すことで、記事を補強し、遠江へ下った若き「女」の経験を踏まえようとする『十六夜日記』の語りには、『うたたね』参照を強く要求する性格が認められる。

『うたたね』に言及する『十六夜日記』の特徴からは、『うたたね』を前日譚として参照せよと要請することで、『うたたね』が表現するものを補強し、『十六夜日記』内に取り入れていると考えられるのではないだろうか。

また『うたたね』の成立時期についてだが、大塚氏は、成立年次を未詳としつつも、比留間氏と次田氏が支持する失恋直後とする説と、玉井幸助氏と松本寧至氏が支持する藤原為家と知り合った三十代頃とする説の二説を紹介している。現状では、作者を阿仏尼とし、成立時期を遅くとも『十六夜日記』以前と見るのが穏当と考えられるため、本稿もこれに賛同する。

さて『うたたね』の主題について、大塚氏は「自己の心情」の表現説、「さすらう自分」の表現説の、二説に集約できると述べている。『うたたね』については、未だ研究が少ない観があるものの、作品が持つ特徴と性質は、村田紀子氏の論と、今関敏子氏の論の指摘に落ち着くと思われる。

まず、村田氏は『うたたね』の「女」について、『源氏物語』の浮舟や、末摘花との関連、小町伝説の受容、そして流離する女性像の表現を指摘する。北山の自邸を「常陸宮の御住まる」と形容し、「女」にとつて身近な人物に下向を勧められる部分が「蓬生」巻と類似するため、『うたたね』の「女」は「待つ女」であり、流浪と待機との間で揺れている存在として位置づけられると

論じる。

続いて、今関氏は『うたたね』には平安期に培われた悲慘な女性の流浪が見られず、むしろ『うたたね』の「女」の薙髪を『源氏物語』の浮舟の姿へ呼応させるなどの物語を踏まえている表現に注目し、「女」についても、出家で恋人の気を惹こうとする人物と見る。特に『うたたね』末尾から、拠点たる都は揺らいでいるため、『うたたね』は、男に置き去りにされた女の内面を表出した作品と論じる。

両氏とも、『うたたね』は「女」の姿を語る作品と捉えており、自己を語る性格を有する日記的な作品として論じている。

『うたたね』からは、太秦への参詣、西山の尼寺への出家、遠江への下向を経験しても、心の安寧を獲得できない「女」の姿を見出す事ができ、その心情の表現が日記的であると捉えられる。

次田氏は『うたたね』から、失恋を克服する「女」の姿を見出しているが、果たして「女」は失恋を克服し、何かを獲得しているかと取られるだろうか。

本稿では、まず、『うたたね』において「うたたね」の語と関連する「夢」が、どのように語られているかを捉えた上で、「夢」と関わりを持つて出現する「友」の語と、作中主体の周囲の人物に対する記述から、「女」の人物像を明らかにしていく。その上で自己の心情と我が身の様子を表現した女流日記文学的作品として、『うたたね』を考えていき、『うたたね』の主題が、「女」による失恋の克服であるか考えていきたい。

一 『うたたね』という題

——小町歌の変容・「夢」が持つ機能の変化——

前節で、『うたたね』における「友」の語は「夢」と関連し得ると言ったが、次に挙げる『うたたね』の冒頭が、関係性の根拠として挙げられる。

『うたたね』の本文は、福田秀一氏校注の『うたたね』⁽¹³⁾より引用した。また引用箇所については、引き続き算用数字を用いて、通し番号を付していく。また本節以降も簡略ながら小見出しを設ける事で、引用場面のあらすじや状況を示す。そのほか、番号は論述の順序に沿って付したため、実際の語りの順序とは前後する。

4 『うたたね』冒頭

物思ふ事の慰むにはあらねども、寝ぬ夜の友と慣らひにける月の光待ち出でぬれば、例の妻戸押し開けて、たゞ一人見出したる。荒れたる庭の秋の露、かこち顔なる虫の音も、物ごとに心を痛ましむるつまとなりければ、心に乱れ落つる涙ををさへて、とばかり来し方行く先を思ひ続けるに、さもあさましく果無かりける契りの程を、など、かくしも思ひ入れけん、我心のみぞ、返すぐ恨めしかりける。

『うたたね』の冒頭、最初の傍線部、「寝ぬ夜の友と慣らひにける月の光」とある箇所では、恋人と疎遠になりつつある事を懊悩

する故に寝られず、「夢」が結ばれない中、「月」が「友」になってしまったと表現される。不眠の記述と「友」の表現との関連性を考える前に、「夢」と関連する語でもある『うたたね』という題名について考えておきたい。

西山の尼寺で恋人の文を受け取った後、病を得て、尼寺から「愛宕」へ移り住んだ場面の「うた、ね」を詠んだ和歌が、『うたたね』という題名の由来と考えられている。

5 『うたたね』という書名の由来（尼寺退去後、転居先の「愛宕」で恋人の車を見かけた後）

かの所に行着きたれば、かねて聞きつるよりも、あやしくはかなげなる所のさまなれば、いかにして耐へ忍ぶべくもあらず。暮果つる空の気色も、日頃に越えて心細く悲し。宵居すべき友もなければ、あやしく敷きも定めぬ十符の萱菰に、たゞ一人うち臥したれど、解けてしも寝られず。

九 はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうた、ねの夢

「うた、ね」を詠む九首目の和歌は「草枕」に言及する事で、「愛宕」が仮住まい・「旅所」（仮の場所、他所⁽¹⁵⁾）である事を表すとも考えられるだろう。

和歌において「うたたね」の語が用いられた際、「寝」と、その語から連想される語が詠まれる場合が多い。例えば「枕」や「夜」などが縁語として考えられ、そこには当然「寝」という行為と密接に関係する「夢」も歌われる。次に引用する『古今和歌

集』「恋歌二」巻頭の小町歌が、その具体例である。¹⁶⁾

6 『古今和歌集』巻十二「恋歌二」巻頭の小町歌三首

五五二 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覺め
ざらましを

五五三 うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼み
そめてき

五五四 いとせめて恋しき時はうばたまの夜の衣を返してぞ
着る

この三首に見える「夢」は、「現」で離れつつある小町と恋人とを繋ぐ最後の回路として機能している。特に「うたたね」の語を詠んだ中央の歌からは、「夢」に見る「人」の姿に彼女の抱く恋しさが視える。

以上の小町歌は、恋人への強い思いを抱いているという共通点を有する。前の二首で「人」の姿が詠まれるが、これは現実には逢瀬が叶っている訳ではない。実際に、五五二番の和歌を見てみると、実際には逢瀬を遂げられないが、相手を慕ってしまう感情を見出せる。また、最後の歌が「夜」を詠んでいる事は、「夢」での逢瀬を踏まえるためであろう。

阿仏尼の『うたたね』の九首目「うたたね」を詠んだ和歌について、この『古今集』小町歌の先例と同様、「うたたね」の語が「はかない夢」を指す言葉として機能していると思われる。

鈴木健一氏が論じるように、和歌及び古典文学における「夢」

の特徴の一つに、引用6に挙げた小町歌に見える、反実仮想としての用法が挙げられる。鈴木氏は、和歌に見える「逢瀬」の修辭として「夢と現実の境界が曖昧」である歌を挙げ、「夢」が「歌を詠むための方法」でもあったと論じ、「想像力をそこに発揮することができる」特徴に注目している。

小町歌と同様に、『うたたね』で用いられる「夢」という語も、恋人と疎遠な状態の中で逢瀬を望む心を表す反実仮想の手段と考えられる。そうした点で、『うたたね』は和歌で「夢」だけが逢瀬を叶える手段であるという仮想を表していると言えるだろうが、その一方で「うたたね」程度の僅かな「夢」しか見られないという自己の現状認識、現実認識を有している。『うたたね』における和歌が反実仮想を表しながらも「うたたね」を詠み、そして散文が鋭く現実を語る点からは、女流日記が持つ現実認識の性格を見出せないだろうか。

出家した「女」の「憂し人しも」とあやにくなる心地する状態から、遠ざかりつつある恋人との関係を留められる「夢」での逢瀬を望む姿勢も見出せる一方で、「女」は自身が不眠で「うた、ねの夢」しか結べないために、恋人と再び交流するのが困難となっている現状を認識していると考えられないだろうか。

『うたたね』の「夢」に着目した劉小俊氏によれば、「夢」の用例は、「王朝物語」のような日々を語る「夢」、恋人と破局した「悪夢」のような「夢」、自身の行為を反省する際の「虚無感」のある「夢」、「現実の中に慰めを求める手段」としての「夢」の四つに分類できるようである。¹⁸⁾それを元に、劉氏は阿仏尼の成長を

論じ、『うたたね』を「未熟な頃の初恋」の回想から「自分の成長」を見出した作品と位置付ける。

また今関氏も『うたたね』の「夢」を論じている。ここでは、「虚構としての『うたたね』という観点」から、『うたたね』内の「夢」を論じる今関氏の指摘に沿って、『うたたね』で記される「夢」が、作品内でどのような存在として位置付けられるか考えてみたい。

『うたたね』における「夢」については、今関氏が「睡眠時の夢の記述」が存在しない点に注目して、「不眠の記が多く、主人公は夢も結べない¹⁹⁾」状況を指摘している。本稿でも、『うたたね』の「女」の不眠状態に注目して、取り巻く状況を押さえていきたい。

引用4に示した冒頭の「寝ぬ夜」という表現にも、不眠の状態が推測できる。さらに今関氏は、次に挙げる二ヶ所の記述から、尼寺への出奔以前の女は、「眠れぬ状況」にあると論じる。

7 大妻往還を思い立つ前の「女」の様子…恋人の来訪を待った結果、夜を過ごしてしまう。

やう／＼色づきぬ。秋の風の憂き身に知らるゝ心ぞ、うたてく悲しきものなりけるを、をのづから頼むる宵は、ありしにもあらず、うち過ぐる鐘の響きをつく／＼と聞き臥したるも、生ける心地だにせねば、げに今さらに、「鳥はものかは」とぞ思ひ知られける。

さすがに絶へぬ夢の心地は、ありしに変わるけぢめも見えぬ

ものから、とにかくに障りがちなる葦分けにて、神無月にもなりぬ。

降りみ降らずみ定めなき頃の空のけしきは、いと袖のいとまなき心地して、起き臥しながめわぶれど、絶えて程経るおぼつかなきの慣らはぬ日数の隔つるも、今はかくにこそと思ひなりぬる世の心細さぞ、何に譬へても飽かず悲しかりける。

8 恋人の来訪直前の様子…この後、通わなくなったために出家を決意する。

今更身の憂さもやる方なく悲しければ、今宵はつれなくてやみなまし、など思ひ乱るゝに、例の待つ程過ぎぬるはいかなるにかと、さすが目も合はず身じろぎ臥したるに、(後略)

引用7、8の出家前の記事のほか、今関氏は、引用5の「愛宕転居」の場面に見られる「たゞ一人うち臥したれど、解けてしも寝られず」から「寝」るのではなく「臥」しているという「不眠」の様子を見出す。こうした眠れない状況に続く形で、先に挙げた「うたたねの夢」が詠まれていく。

「夢」を語る「不眠の記」という今関氏の指摘でも分かる通り、『うたたね』では、恋人に執着しながらも、物思いによる「不眠」のために、小町歌に見られる逢瀬へ浸れる最後の手段である「夢」という回路が機能していない。そこには夢にもすがれない「女」の姿が想起できないだろうか。

不眠によって「夢」での再会も叶わない「女」に、傷心や悩みからの解放は見られない。愛宕や遠江へと移ろつていく姿からは、傷心の回復なく、辛い思い出の残る「都」から脱出しようとする「女」の心情を見出せる。そのため『うたたね』は、女の傷心と、流浪による苦悩を語る作品と捉えられるだろう。

『うたたね』という題名は、引用6に挙げた、はかない「夢」ではあるものの、再びの逢瀬が実現していた、『古今集』小町歌を踏まえているものと思われる。しかし、『うたたね』における「女」は、恋人との疎遠の後に再会もなく、「夢」による逢瀬も叶わない。末尾では、再び恋人と結ばれる事なく、一度は脱出した筈の「都」に、ただ留まる結末が語られる。

9 『うたたね』末尾の語りと和歌

暮れ果つる程に（注…都の邸に）行き着きたれば、思ひなしにや、こ、かしこも猶荒れまさりたる心地して、所々漏り濡れたるさまなど何に心留まるべくもあらぬを見やるも、いと離れま憂きあばら屋の軒ならんと、そゞろに見るもあはれなり。老人（注…乳母）はうち見えて、こよなく怠りざまに見ゆるも、憂き身を誰ばかりかうまで慕はむと、あはれも浅からず。

その後は、身を浮草にあくがれし心も、こり果てぬるにや、つくぐとかゝる蓬が袖に朽ち果つべき契こそはと、身をも世をも思ひ鎮むれど、従はぬ心地なれば、又なり行かん果いかゞ。

二二 われよりは久しかるべき跡なれば偲ばぬ人はあはれとも見じ

帰京後の邸の荒廃を描写する語りは、次に引用する『土佐日記』の本文にも見える。²⁰ 羈旅による時間経過を表す常套表現であろうが、都における権勢の低下や、旅による家計の疲弊を想起させる表現でもあろう。

10 『土佐日記』末尾…「女」の屋敷の荒廃

家に到りて、門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。家にあづけたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みてあづかれるなり。

（中略）

さて、池めいて窪まり、水つけるところあり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千歳や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ」とぞ、人々いふ。

『うたたね』も邸の荒廃を語っているが、無事に帰京した点に注目すれば、平凡な末尾とも言えそうである。しかし、小町歌により流離という悲劇を連想させ、身の破滅を導き得る要素が、題名の由来にもなった先の九番歌に見出せるにも関わらず、『うた

たね』は帰京する結末を語る。

小町歌の引用で『玉造小町子壮衰書』²¹に見えるような、流浪の末、身をやつし、世を通れていく小町流浪伝説の話を想起させながら、『うたたね』はその期待を裏切っていく。つまり、『うたたね』における作中主体の「女」は、小町の結末のように「今見寡独 而跽道路²²」という流浪が語られ、なおかつ東国に関連する恋歌が残るような物語・説話に支えられた女性には成り得ず、失恋の思い出が残る都に留まってしまふ女性の姿として語られるのである。

恋人との仲を繋ぐ最後の回路であろう「夢」は「うた、ねの夢」故に長続きしないと語られる。後半の「遠江下向」で、ようやく「夢の通ひ路」が「絶え果て」てしまったように語られる箇所からは、「遠江」に至るまで、仮初めでも恋人との再会を果たしたいという「女」の心情が継続していたと言えるだろう。

恋人と疎遠になっている現状に懊悩し、不眠の状態に陥ってしまった『うたたね』の「女」は、「出家」と「愛宕転居」に及ぶものの、結局は「遠江」に留まるまで、恋人を失った悲しみと執着心を取えられなかった。

さて「夢の通ひ路」が「絶え」たように語られる「遠江」の場面であるが、その中でも次に挙げる引用1-1の散文と和歌からは、遠江下向を果たしてもなお、「夢」で恋人に一目逢いたいという「女」の心理が見出せないだろうか。

1 1 「遠江下向」の記事…乳母の病状を知る以前にもたらされた心の平安

荒磯の波の音も、枕の下に落ち来る響きには、心ならずも夢の通路絶え果ぬべし²³。

一七 心からかゝる旅寝に歎くとも夢だに許せ沖つ白波

「夢の通ひ路」は、あくまで「絶え果てぬべし」と語られる。つまり、完全に絶え果ててしまったと語られている訳ではない。特に和歌において「夢だに許せ」と願ってしまっている点に、「女」の執着を僅かに見出せるのである。

言い換えるならば、「女」の恋人との関係は真に「絶え」てはいないと考えられるのである。この事は、引用9に挙げた『うたたね』末尾に見られる、恋人を意識した中務歌の引用とも関わる。恋人を忘れられない「女」の姿が想起できる。乳母の病状が「怠りざま」と知っても、「従はぬ心地」は解消しない。この心理の安寧を得られない「女」は、成長したと言えるだろうか。

もちろん、劉氏が指摘するように、『うたたね』は「まさに夢見ていた物語の世界のような」恋人との日常が失われ、そこから往還を経て「現実と直面し、現実に従おうとする」²⁴女の姿を描いた作品と考える事も可能だろう。

しかし、『うたたね』の「女」が経験する往還は、『源氏物語』『須磨』『明石』巻に見られる、最終的に「都」での権勢が展開されていく光源氏の貴種流離譚のような、一定の成果を獲得するための困難の構図には当てはまらない。だからと言って、三河掾

であつた文屋康秀とのやり取りで詠まれた小町歌⁽²⁴⁾などから想起される流浪する悲劇的な女性像にも結び付いていない。

『うたたね』の「女」の不眠の状況は、現実では恋人に会えないながらも、かろうじて「夢」で結ばれている小町の和歌に見られるような、はかなくも、どこかで結び付く恋愛関係を表していない。また『うたたね』末尾に見える都に留まる「女」の姿には、安寧の獲得を見出せるかも知れないが、そこには「従はぬ心地」が残されてしまっている⁽²⁵⁾と明かされる。都に戻つたとはいえ、一度遠江まで下向した「女」は、再び唐突に流浪してしまいかねない。

『うたたね』の結末は、物語のような「夢」の逢瀬すらも結ばれず、失恋の物思ひも解決しない状況と考えられる。この事は、物語や説話に見られるはっきりとした境遇の変化が認められないとも言えよう。『うたたね』は、現世の執着を断ち切れずに、引きずつてしまふ心情を描いていると捉えるのが自然であり、「女」の置かれている現状を語っていると考えられないだろうか。

二 「友」の不在・「賤」しき人々の存在

恋人との逢瀬への望みを含んだ「夢」すら結べない『うたたね』の「女」は出家後、恋人への執心に惑うほか、病を得た事もあって、尼寺を退出し、都の内ながらも別の地へと転居してしまふ。『うたたね』では、こうした流浪・流離の語りが顕著であり、次田香澄氏は、この流浪の性格を「漂泊」と捉えている。ここで「友」という存在に注目して、『うたたね』における「流浪」

または「漂泊」の特徴を考えていきたい。

『うたたね』に見られる「友」の用例は五例しかない。おそらく「都」での日々を語る『うたたね』の前半部でも、都の周縁へ向かう三度の往還と遠江への往還が語られるように、一ヶ所に留まらず流離するため、知人との接触も少ないのだろう。

ここからは詳細に「友」の表現に注目して、不眠の「女」の周辺を考察していく。

12 『うたたね』に見える「友」の用例五つ

a 冒頭の一文（引用1と重複）

寝ぬ夜の友と慣らひにける月の光待ち出でぬれば（後略）。

b 「愛宕転居」の記事（引用2と重複）

宵居すべき友もなければ、あやしく敷きも定めぬ十符の萱^{すかも}菰に、たゞ一人うち臥したれど、解けてしも寝られず。

c 「愛宕」で経典を読む「女」。（場面は、引用2の直後に当たる）

日頃経れど、訪ひ来る人もなく心細きまゝに、経つと手に持たるばかりぞ、頼もしき友なりける。「世皆不牢固」とある所を、強ゐて思ひ續けてぞ、憂き世の夢も自ら思ひ醒ますたよりなりける。

d 病状回復により「故郷に立ち帰」つた後、邸で過ごす日々。

壁に背ける灯火の影ばかりを友として、明るるを待つもしづ心なく、尽きせぬ涙の雫は、窓打つ雨よりもなり。

e 遠江下向の記事「鳴海の浦」通過の際の心情

思ふ事なくて都の友にもうち具したる身ならまし^かばと、
人知れぬ心の中のみさま^らく苦しくて（後略）

用例 a、c、d に見られる「友」の語は、「女」が物に対して親しみを抱いた事を語るための比喩である。残る二例に見える「友」の表現は、「女」が「宵居すべき友」もないほどの孤独と、その辛苦を語るために用いられている。

特に、用例 b、e の「友」を引き合いに出す表現からは、「女」の心情を共感し理解する人物の不在が読み取れないだろうか。「友」の存在を語る作品として、『うたたね』と同様に、東国への下向を語る『伊勢物語』が挙げられる。その「東下り」の「昔男」でさえ「友とする人、ひとりふたり」²⁸連れているのに対し、『うたたね』の「女」の境遇からは、親しい「友」の不在が認められるのである。

まず用例 a は、眠れぬ夜という状態が語られる。今関氏は「月の光」が「友」となった事に注目している。「宵居」²⁷を語っている用例 b でも、用例 a と同様に、寝られない状況を語るため、この箇所にも「夢」の不在が覗える。

用例 c では、「経」の語が見られる。この箇所では『法華経』「随喜功德品」の一節である「世皆不²⁹牢固」、如³⁰「水沫泡焰」が語られている。

このことから、『うたたね』の「女」は、女人成仏を説く一節を持つ『法華経』を通じて、世の無常を知り得たと言えるだろう。

う。けれども、その後の遠江下向からは、恋人との絶縁に対しては心残りがあることが覗える。そのほか、尼寺であるのに尼僧との会話を省略する語りからは、仏道教授または教義を共有する意志が希薄で、あまり信心深くない「女」の人物像を推測できる。こうした語りの性格からも『うたたね』の「女」の未練を振り払えない心情が考えられないだろうか。

用例 c のように、経典を読み、無常を理解する「愛宕」での日々を経験しても、用例 d に見られるような、自邸での生活に戻っても、結局は用例 e の、遠江下向の旅で、「友」のいる状態を想像してしまう。転居先の「愛宕」で経を読むなど修行しても、行脚を兼ねて遠江に下向しても、結局、失恋の悲嘆と孤独は克服できず、むしろ共感者となり得る「友」という存在を希求するほどに孤独が深まった。

『うたたね』の本文は「友」を引き合いに出す比喩を表すことで、かえって作中主体の置かれている「友」のいない状態を浮き彫りにしている。つまり、「友」の引き合いに出す比喩からは、「孤立」から脱したいが、それが叶わないでいる「女」の姿が覗えるのである。

そのほか「友」以外で、「女」の周辺の人物として重要な存在であるはずの「後の親」と「乳母」についても観念的な記述が目立つ。

語りにおいて、「女」の直接的な血族は見られず、養父「平度³¹繁」——『続古今集』に入集した際の和歌の詞書にて、父の名が認められる——と、「乳母」が語られるだけである。このことか

ら実父、実母の不在を暗示している『うたたね』の本文は、「女」を、親との縁が薄く、親との関係が屈折している人物として造形していると言える。

そして、「女」の周辺にいる「後の親」・「乳母」という人々の行為は、尼寺から戻った後の作中主体の何らかの行動の契機・要因となっているが、最終的に「女」を助ける行為とはなっていない。そのため、一見して「女」の周囲は「成長」を促すような環境として整えられているが、それを支えるはずの人物たちの姿がどこか屈折していると捉えられる。

「女」の身辺を押さえた上で、今度は恋人に文を送った箇所（引用9）に見られる、恋人への執着心を見ていこう。実の親など「女」にとって身近な人々が登場しない語りからは作中主体の周辺にいる親しい人物と他者は、共感者として不十分であると推測される。同時に、はかない「夢」のような逢瀬も失われ、物思いを抱き続ける「女」の様子からは、恋人への執着と依存が考えられる。

13 太秦参詣から帰り、邸で恋人を待つ様子

例の人知れず中道近き空にだにたど／＼しき夕闇に、契り違へぬるしるべばかりにて、尽きもせず夢の心地するにも、出で聞へん方なければ、たゞ言ひ知らぬ涙のみむせ返りたる。

次田氏によれば、引用13に見られる恋人の登場によって、文体

が「醜化・婉曲によって曖昧³⁰」になると言い、作中主体の「女」が「恋の通い路」でもある「中道」もおぼつかない中での恋人の訪問に「夢」の心地を覚えているとしている³¹。ここにも、恋人への執着を見出せる。「友」の不在や血族の屈折を考えると、おそらく恋人は、「女」を理解する数少ない共感者であるために、「女」は執着してしまうのだと捉えられる。

この恋人の来訪は、『うたたね』における作中の「現実」の中での出来事であり、『うたたね』の本文で、恋人と逢って交流するのは、この引用13が最後である。これ以降となると、手紙のやり取りで恋人の仕打ちが語られる箇所と、愛宕転居の際に一瞬だけ姿を見る場面しかない。

その後は傷心を受けてからの「女」の姿が語られる。引用9のように、最終的に恋人を中務歌の「偲ばぬ人はあはれとも見じ」に当てはめる³²。恋人は「女」を「あはれ」と思わないだろうと言う「哀切な感情と自嘲³³」の語りからは、恋人の共感を欲してしまい、傷心から抜け出せない「女」の様子を見出せる。

『うたたね』では、恋人を失う「女」の周辺には「友」がいない事が、語りによって暗示されるが、同時に「桂の里の人」や、墨俣の渡し「賤の男」といった、貴族ではない「賤しき」人々への注目が一部に見える。まずは、「西山」の尼寺に行くはずが迷ってしまった「女」を助ける「桂の里の人」を見ていく。

14 尼寺へ行く道に惑い、「桂の里の人」に案内されていく。

いたくまはりはてにければ、松風の荒くしきを頼もし人にて、これも都の方りと覚えて、蓑笠など着てさえづり来る女あり。小童の同じ声なると物語する也けり。これや桂の里の人ならんと見ゆるに、たゞ歩み寄りて、「これは何人ぞ。あな心憂。御前は人の手を逃げ出で給か。また口論などを給たりけるにか。何故か、る大雨に降られて、この山中へは出で給ぬるぞ。いづくよりいづくを指しておはするぞ。あやしく」とさえづる。何と言ふ心にか、舌をたび／＼鳴らして「あないとおし／＼」と繰り返し言ふぞ嬉しかりける。

しきりに身の有様を尋ねれば、「これは人を恨むにもあらず。また口論とかやをもせず。たゞ思ふことありて、この山の奥に尋ねべきことありて、夜深く出でつれど、雨もおびたゞしく、山路さへまどひて来し方も覚えず行先もえ知らず。死ぬべき心地さへすれば、こゝによりあたる也。同じくはそのあたりまでみち引給ひてんや」と言へば、いよくいとおしがりて、手を引かへて導く情の深さぞ、仏の御しるべにやとまで、嬉しうありがたかりける。程なく送りつけて帰りぬ。

「桂の里」の女は作中主体を尼寺へと案内する存在として語られる。桂の女は、尼寺へ向かう「女」を道案内という行為で一時的に

的に助けているが、その原因である物思いへの救いには至っていない。

引用14に見える尼寺に向かう状況を振り返ると、尼寺があるらしい西山に向かう途中の難髪した「女」は、都の外れで道に迷う状態にある。その状況から桂の女は失恋を原因に出家したと理解できたかも知れない。

しかし、『うたたね』本文上の表現を見る限りでは、桂の女が作中主体の「女」の悲嘆と孤独まで理解していたかは不明と言わざるを得ない。道案内という具体的な手段を「女」に与える存在ではない「桂の里の人」は、「女」の心情に真に共感する存在として語られているか、疑問が残るのである。

確かに『うたたね』の「女」は「仏の御しるべ」というまでに、桂の女の道案内に感激している。しかし、西山の出家は、病を得る形で途絶えてしまう。『うたたね』の「女」は、桂の女の救いを生かせず、出家と言うある種、決定的な流離に身を置く事のできなないのである。

このほかに、『うたたね』後半部「遠江下向の記」の「墨俣の渡し」には、「賤の男」が登場する。都人とは対照的な人物として語られるが、この場合は、尼寺へ案内した桂女よりも、さらに観念的な記述であると言える。次に挙げる引用14にて、河原で大声を出す存在として語られているが、これについて今関氏も、都とかけ離れた鄙を語る表現の一つと見ているように、³⁴⁾『うたたね』における「賤の男」は、あくまで「都」ではない場所を表す存在として捉えた方が良好だろう。

15 「遠江下向の記」に見られる「墨侯」の渡し舟

墨侯とかや、ひろくとおびた、しき河あり。往來の人集りて、舟を休めずさしかへる程、いと所狭うかしがましく、恐ろしきまでののしりあひたり。からくしてさるべき人皆渡り果てぬれど、人々も興や馬と待出づる程、河の端に下りゐて、つくぐと来し方を見れば、あさましげなる賤の男ども、むつかしげなる物どもを舟に取り入れなどする程、何事にかゆ、しく争ひて、あるひは水に倒れ入りなどするにも、見慣れずもの恐ろしきに、かゝる渡りをさへ隔て果てぬれば、いと都の方遙かにこそはなりゆくらんと思ふ（後略）

引用15の「賤の男」の描写は、羈旅に特有である、要衝の危険性・白波の危険性を表すもので、都から遠ざかった「女」の姿を印象付けるための存在と見た方が自然である。流浪・漂泊を繰り返していく『うたたね』の「女」は、こうした卑賤とも言える「他者」との出会いも経験するが、彼らとの交流で具体的に何かを獲得した訳ではない。

『伊勢物語』「東下り」の場合、「渡守」に教えられた「都鳥」の名を元に「名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はいりやなしやと」と詠む事で、「船こぞりて泣きにけり」という主人公の「昔男」が「友とする人」にかりうじて共感される状況が作られる。しかし、『うたたね』における「都」と縁遠い他者は、「女」の心情を理解する者、もしくは作中主体にきつかけを

与える存在として語られていない。つまり、『うたたね』の旅は、転機となる流離となっていないのである。

『うたたね』に見られる養父などの「女」の近辺にいる人々についても、「桂の里の人」と同様に、心の安寧を獲得するための手段として機能しておらず、恒久的な救いであろう心の安寧の獲得には結び付いていない。『うたたね』本文からは、共感者を獲得できず、恋人というかつては共感者であった者さえも逃がしてしまふ「女」の姿が浮かび上がらないだろうか。

三 「遠江」の「夢の通ひ路」・流浪の結果

繰り返しになるが、引用9に挙げた『うたたね』の末尾には、『後撰集』歌人中務の和歌が記されており、これは彼女の「自嘲」であり、恋人への「哀切」の念を示すと捉えられる。『うたたね』末尾の意義から、全体の主題を推測するには、この末尾における引用が、作中主体の「女」の傷心回復を表し得るのか、検討する必要があるだろう。

ここでは、引用11に見られる「夢の通路絶え果ぬべし」という表現に注目してみる。「夢」という逢瀬を遂げることでできる接点に対して、「通路」の消滅を言い切るような「にけり」を用いず、「ぬべし」を用いる表現は、遠江で獲得したと思われる恋人への執着が「絶え果」た状態の継続を指しているだろうか。『うたたね』の本文では、恋人と逢うことのできる回路である「夢」への執着に対して、「ぬべし」という完全に絶え果てたと言いつつ切らない表現がなされた後、和歌において、「夢だに許せ沖つ

白波」と詠まれていく。

はかなく短い「うた、ね」程度の夢では、恋人と再び逢うことも叶わないと承知してはいるものの、心のどこかで期待してしまふ。如何ともし難い心残り、「絶え果ぬべし」の周辺に見出せるだろう。

夢による逢瀬への執着が断ち切られているか不明な状態で、作中主体の「女」は、乳母の病状を聞き帰京してしまふ。『うたたね』末尾における和歌の引用は、傷心の鈍化とも捉えられているが、作中主体自身の「自嘲」と、失恋の「哀切」で締め括られることは、果たして成長を表すことになり得るだろうか。『うたたね』の「女」は、最終的に失恋の痛手を完全に解消させたのだろうか。ここからは、『うたたね』に見られる、彼女の仏道修行の様子から、執着の変化が視えるか考察していく。

「女」が、物思いの解消を願って仏閣などに参詣する行為自体は、出家を決意する以前、疎遠になりつつある状況下にも見える。

16 恋人と疎遠な中で「太秦参詣」を思い立つ

いとせめて、あくがる、心催すにや、にはかに太秦に詣でてんと思ひ立ぬるも、かつうはいとあやしく（原文ママ）、
仏の御心の中恥づかしけれど、二葉より参り慣れにしかば、
すぐれて頼もしき心地して、心づからの悩ましさも愁へ聞えんとにやあらむ、しばしは御前に。

共なる人々、「時雨しぬべし。はや帰り給へ」など言へば、

心にもあらず急ぎ出づるに、法金剛院の紅葉、この頃ぞ盛りと見えて、いと面白ければ、過ぎがてに降りぬ。高欄のつまなる岩の上に下りあて、山の方を見やれば、木々の紅葉色々に見えて、松にかゝれる枝、心の色も他には異なる心地して、いと見所多かるに、憂き故里はいと忘れぬるにや、とみにも立たれず。折しも風さへ吹て、物騒がしくなりければ、見さすやうにて発つ程、

一人知れず契りし仲の言の葉を風吹けとは思はざりしを

と思ひ続けるにも、すべて思ひ混することなき心の中ならんかし。

帰てもいと苦しければ、うちやすみたる程、御文とて取り入れたるも、胸うちさはぎて引き上げたれば、たゞ今の空のあはれに日頃の怠りをとり添へて、細やかに書きなされたる墨つき、筆の流れも、いと見所あれど、例のなか／＼かき乱す心迷ひに、言の葉の続きも見えずなりぬれば、御返りもいかゞ聞えけん。

「心づからの悩ましさも愁へ聞えん」とあるように、「女」には物思いを振り払うべく参詣へ臨む意志が捉えられる。引用16からは、太秦参詣によって「憂き故里」を忘れられたが、恋人から届いた文によって、「夢」のような日々を思い出し、物思いが深まった事が分かる。次田氏は、これを「作品における「漂泊」の始まり」として、太秦参詣を発端に「転地・漂泊を試みる」よう

になると評する。⁽³⁸⁾

確かに、『うたたね』に見られる移動には、解決のための手段として転地を繰り返す性格が認められる。しかし、そうした手段が「女」の心情に安寧を与えるような現世利己的性格を有する成果を導いていると言えるだろうか。「女」の「従はぬ心」を語る『うたたね』の記述からは、参詣の機会を獲得しても、恋人への執着に囚われ、振り回されながら、恋愛の維持に拘泥する姿が見える。

もちろん現世利益は方便であり、「女」の目標は厳密に言えば、成仏または往生を遂げる事となるだろう。しかし、『うたたね』に見られるものは、尼寺の記事、遠江下向の記事の結末に見られるように、修行または行脚を途中で止めてしまう「女」の行爲である。

女人成仏を説く『法華経』を読み、世の無常を知り得ていながら、『うたたね』の「女」は修行をせず、都の周縁に漂泊するばかりである。遠江下向を遂げて、結局は都に戻ってきてしまう。行脚の遂行もままならず、恋人との思い出が残る都に戻ってしまう「女」の状況からは、来世へ期待する事も困難であると考へられないだろうか。

桂の女に案内された作中主体は、次の引用の通り、無事に西山の尼寺には到着する。ここでは、傍線部に注目していく。

17 尼寺到着直後の状況（出家を遂げた「女」の疲勞・尼寺の様子）

待ちとる所にも、あやしく物狂をしきもののさまかな、見驚く人多かるめなれども、桂の里人の情に劣らめやは。さまぐに助け扱はるゝ程、山路は猶人の心地なりけるが、今はとうち休む程、すべて心地も失せて、露ばかり起きも上られず、いたづら者にて臥したりしを、都人さへ思ひの外に尋ね知る便りありて、三日ばかりはとにかくに障りしかども、ひとひに（原文ママ）本意遂げにしかば、一筋に憂きも嬉しく思ひなりぬ。

さてこの所を見るに、憂き世ながらかゝる所もありけりと、すぐ思ふさまなるに、行ひ慣れたる尼君たちの、宵あか月の閑伽怠らず、こゝかしこにせぬれいの音などを聞くにつけても、そろに積りけむ年月の罪も、かゝらぬ所にて止みなましかばいかにせましと思ひ出づるにぞ、身もゆる心地しける。故郷の庭もせに憂きをしらせし秋風は、法華三昧の峰の松風に吹通ひ、眺むる門に面影と見し月影は、靈鷲山の雲居遙かに心を送るしるべとぞなりにける。

四 捨てて出でし鷺の御山の月ならで誰を夜なく恋わたりけん

右の引用では「そろに積りけむ年月の罪も、かゝらぬ所にて止みなましかばいかにせまし」と語る点に注目できる。逢瀬を「罪」と認識し、失恋と自己の反省を見出す事も可能だろう。

次田氏は「すぐく思ふさまなる」尼寺の様子と、「一筋に憂きも嬉しく思ひなりぬ」という「女」の様子を「理想化された表現」と指摘し、こうした尼寺への表現を、どこか「空虚」であると言う。

第四首目の和歌は、「靈鷲山」という「釈迦が衆生を説法した地」を詠み、その真理の「真如（永久絶対の真理）」を歌う。次に、仏法の真理を詠む四首目の和歌の続きを見ていこう。

18 尼寺に身を寄せながら、恋人との日々を回想し、現状を顧みる。

いでやをのづから、大方の世の情を捨てぬ無げのあはればかりを折／＼に散りくる言の葉もありしにこそ、露の命をもかけて今日までも長らへてけるを、憂き世の人のつらき偽りにさへ、慣らひ果てにけることもあるにや。同じ世とも覚えぬまでに隔たり果てにければ、千賀の塩竈もいとかひなき心地して、

五 みちのくの壺の碑かきたえて遙けき仲となりにけるかな

次田氏によれば、「自省・悔恨」が見られる箇所である。おそらく「遙けき仲となりにけるかな」という部分が、その証拠の一つに挙げられるだろう。

尼寺での修行によって、自己を見つめる「女」は、自身の心の移ろいを理解する事で、今までの行為を「悔恨」してしまう。ど

こともなく遊離する「流浪する女」の造形も捉えられるかも知れない。しかし、小町歌を変容させる形で、恋人と結ばれない「夢」という存在へ言及する『うたたね』からは、恋人への執着心に振り回されていく女性像を見出すことができる。

続く第二節でも、屈折した「友」の記述に注目した周囲の人々に関心を寄せない「女」の姿を指摘して、『うたたね』の「女」には、恋人ばかりに執着し、成長のきっかけになり得る「桂の里の人」や「後の親」、「賤の男」、「乳母」という他者との関係を希薄にしてしまう人物像が付与されていると述べてきた。

これらのほか、他者へ関心を寄せず、恋人に執着してしまった結果「遠江」に下向しても傷心が完全に回復したとは言いがけないことや、他者からの共感を得ようとせず、恋人との復縁によって生じると思われる共感の回復を望んでしまう女性像の描写からも、『うたたね』は「女」の成長を語る作品ではなく、「女」の心情を語る日記的な作品と捉えるのが自然ではないだろうか。

そのうえで女流日記の系譜上における『うたたね』と、それに言及する『十六夜日記』の二作品の関連性を元に、女の一生を語る『更級日記』との接点を見出せるか、検討していきたい。

結 『うたたね』の主題——『十六夜日記』との関連から『更級日記』の構成を見出す——

『うたたね』は、「太秦」、「西山の尼寺」、「愛宕」への転居といった、都の周縁への「往還」とも言うべき旅を語る。しかし、作中主体はこうした「往還」を経ても、恋人への執着を拭えず、

「遠江下向」に身を委ねる事となる。往還と下向を語る箇所からは、恋人との疎遠による物思いを晴らすべく、参詣・行脚する構成が覗える。

こうした失恋を契機とする旅は、最終的に都へ戻る往還と位置付けられ、それが都に我が身を置く事、ひいては「女」の、恋人に対する態度の確立という一定の成果を得たとも考えられるだろう。

しかし、『うたたね』の「女」は「太秦」や「西山」へ向かい、そして「遠江」に至って「夢の通ひ路絶え果てぬべし」と語られる状態となっても、結局は「夢だに許せ」と歌ってしまふ。完全に傷心が解決したわけではないと言えるだろう。

それどころか、末尾では、「従はぬ心地なれば、又なり行かん果いかゞ」とあるように、衝動的な行動の反省と、向こう見ずとも言える行為を誘発させる心理に振り回される苦悩が語られている。

確かに、『うたたね』に見られる「女」の行為、尼寺への出家や遠江下向などの「漂泊」は、鎌倉の仏閣に遊ぶ様子を語る『海道記』や、『東関紀行』にも散見される、行脚を意識した羈旅と位置付けられるかも知れない。

けれども、羈旅・遊山といった行脚から思想の獲得を目指す『海道記』や、それと同様に宗教性・思想性が少なからず認められる『東関紀行』などと異なり、『うたたね』は、「女」が尼寺に身を寄せ、遠江へ下向するなどして、心の安寧を獲得したが、その状態は継続しなかった事を語る。『うたたね』の末尾は「女」

の「従はぬ心地」を語り、そしてその行く末を案じるのである。その結末において、「女」は恋人との思い出が残る都に留まってしまう事は、物思いが解消されない事を表し、行動の結果、何一つ進展しなかったという、どこか不如意な状況を描いたものと言えるだろう。

都から立ち去る構図を用いながら、流離譚の構成を成立させず、さらに仏道修行によって悟りを得るという予想される因果関係を無視する。共感者であったと思われる恋人を忘れられず、彼の関係に執着して心の平静を獲得できない「女」は、ひたすら漂い続けてしまふ。実際に『うたたね』における「尼寺への出家」や「遠江下向」の記事を見ると、恋人を喪失した「女」の物思いに惑う姿が表現されている。『うたたね』の「女」は、ただ遊離し、漂泊する移動を繰り返すだけの存在と捉えられるのである。

もちろん、「女」の周囲に成長の契機や転機が存在しない訳ではない。『うたたね』の作中主体は、「漂泊」によって、身辺の人々や、卑賤の人々といった他者を認識する事になる。しかし、その後の往還における他者との関係を見ると、彼らの行為は「女」の物思いを解消させるものとして語られていない。恋人のような共感者の代わりとなり得る人物は出現しなかったと考えられるだろう。具体例として、『うたたね』の「女」の近親者である「後の親」と「乳母」の出現する箇所が挙げられる。彼らの登場は、「女」の行動の動機を与えるだけで、彼女を成長させるきっかけとして機能してはいない。

出家によって執着を捨ててゐる事もできなければ、「道路」をひたすら行く流浪に身を投じざるを得ない悲劇ともならない。行動が「女」の心の安寧の獲得につながる状態の表現は、言わば失恋を乗り越えて「成長」という救いすらない世界、または劇的な変化のない現世の表現とも考えられる。

出家や往還を通じて、平穩——あるいは恋人に代わる新たな共感者——を獲得できなかった女性の姿を語る『うたたね』は、具体的な行動で何かを得られるわけではないと語る事で、不如意な現^{まづ}を生きる人物を表現しているのである。

それに対して、『十六夜日記』の作中主体である後家の「女」は明確な目的を有しているように思われる。実際、『十六夜日記』の本文で、旅の動機を語る「序」を見ると、夫と子を得た「女」が、莊園相続を巡る訴訟という目標と、勝訴による歌道家の安定という目的がある旅に臨み、その結果として鎌倉に滞在している事が分かる。福田氏の言を借りれば「旅の動機」であるが、この動機は『十六夜日記』の末尾「鎌倉滞在記」まで一貫して語られ続けている訳ではない。

東海道を下る「路次の記」は苦勞を伴うもので、一時的に旅の意義を忘れてしまうこともあり得るかも知れない。しかし、目的地である「鎌倉」に身を置いたにも関わらず、再び旅の目的に触れないのはどういうことだろうか。

語り直さないことで、敢えて確たる訴訟に対する意志を示しているとも見ることができないが、「滞在記」は、十四日に及ぶ長い東海道の記述の末に当たる箇所であるにも関わらず、そこ

では、異境である「鎌倉」に辿り着き、動機を再び示すという形で、作中主体の規定を行っていないのである。

それどころか、「鎌倉」到着以降のテクストは、訴訟について全く記さなくなってしまうのである。莊園相続を巡る訴訟を原因としながら、その解決どころか、その手段の進展すら語らなくなってしまう『十六夜日記』の語りの姿勢について、考える必要があるのではないだろうか。『十六夜日記』全体の考察では、やはり和歌が五十四首も記されている「路次の記」との関わりが重要であろう。

『十六夜日記』の「鎌倉滞在記」は、都との「音信」のやり取りを断続的に表してこしているが、その前段、人との交流が希薄で孤独な旅路を語る「路次の記」は、よりにもよって『うたたね』で経験した「遠江」の旅に関連する出来事に言及している。つまり、『十六夜日記』「序」において訴訟をきっかけに行動しているはずの「女」は、『うたたね』での出来事を経験している人物として規定されてしまうのである。より詳しく言えば、『十六夜日記』のテクストは、その作中主体である「女」を、『うたたね』で失恋した「女」として定め、その後、何の因果か歌道家の当主の後妻となり、子を産み、夫と死別した人物と規定しているのである。

この時、歌道家を継ぐ後家という作中主体の規定は、「此（注：「前右兵衛督為教の御女」である京極為子）せうとの為兼の君」と、息子「侍従^{たみすけ}為相の君」との関係を語る『十六夜日記』が担保する。『うたたね』への言及と「侍従」とのやりとりからは、

『うたたね』の「女」の失恋からの回復と成長、そして夫と子の獲得を覗くことができる。

けれども、『十六夜日記』は獲得したものの保持を語るだけの日記ではなく、夫の死によって、鎌倉へ下向せざるを得なくなった「女」を語る日記でもある。一旦は獲得した筈の共感者を失い、旅に出るという構図には、『うたたね』との共通性が認められる。

先に『十六夜日記』の情景描写を論じた際、日記からは「富士」などの東海道の情景には醜化表現と考えられる箇所が存在し、そこから夫との死別と、子供との羈旅による離別という二つの喪失を見出せると指摘した。⁽⁴⁶⁾最愛の存在を喪失した事を契機とする点で、『十六夜日記』の夫没後に臨んだ訴訟の旅は、『うたたね』における失意の結果としての「漂泊」と、相似していないだろうか。

『十六夜日記』の「女」は、莊園獲得のために勝訴を望んでいたが、結局は裁判の進展しない「鎌倉滞在」に陥ってしまう。日記における滞在は、表面上は、訴訟という確固たる目的と、都の人々との「音信」によって支えられている「女」を表すものの、都の人々と文通するばかりの「鎌倉滞在」を語る事で、当初の目的であった裁判が全く進展しない停滞した状況と、都ならざる異郷「鎌倉」に留まらざるを得ない老女の孤独な様を暗示している。それは、歌道家の血縁と人脈という都との文化的・権威的接点を誇示するという虚栄に彩られた、裁判の音沙汰なく時間が徒ら過ぎて、何の結果も得られていない状況描写である。

「細川」を巡る「訴訟」という要素は、『うたたね』の修行のように一定の効果は見込まれるものの、直ちに実現するものではない。そうした建設的とはいえ他力本願な行為にする他に方法がない、不如意な「女」の状況をほのめかす要素として語られる。

さらに注目できる点として、都に戻れない「女」は、『更級日記』末尾に見られる夫との死別を契機とした孤独によって、東国に囚われてしまう「孝標女」の老境とも似通う事が挙げられる。

『更級日記』において、断片的ながら語られる父「孝標」の姿と、同様に断続的である息子の記述からは、父や子の動静よりも、夫の喪失が強調される本文の傾向が覗える。「孝標女」は夫との死別がきっかけとなって、血族との交流が滞り、京に居ながら孤独を覚えていく事になる。その結果、『更級日記』の末尾の語りにおいて、作品内で仮構された「東国出自」を持つ作中主体の自己認識が強く意識される事となる。つまり、『更級』では、夫との死別がある種の悲嘆の原点として位置付けられているのである。

それに対し、『十六夜日記』における「女」の置かれる社会的地位・状況を考えるには、まず日記のコンテクストとしての、為家と阿仏尼の関係を押さえておく必要がある。

田淵句美子氏は、阿仏尼の『続古今集』入集について「はじめの勅撰集に、ほとんど歌壇で活躍していない無名の女房歌人が三首も入ることは珍しい」とし、撰者だった「為家の推挽」を推測するほか、飛鳥井雅有の『嵯峨のかよひ路』において、為家の別邸、嵯峨中院で阿仏尼は「女あるじ」として『源氏物語』の講

師を務めたとある事から、為家との関係は親密だったと推定している。⁴⁸

『十六夜日記』において「為家」は、「阿仏尼」の共感者たり得る人物として機能すると考えられる。この構図は『更級日記』に見られる「橘俊通」と「孝標女」の関係と類似するだろう。共感者を喪った「女」は、新たに共感者を見出せず、孤独になつていくという場面展開の順序についても同様である。

確かに、「鎌倉滞在記」では、都の人々との交流が語られており、そこで息子たちの和歌に点を付けるなどして、自身の行動の確認とも言ふべき作業が行われている。しかし、あくまで文通は断続的な遅延と断絶を孕む「危うき」交流と言えり。交流の疎遠については既に「路次の記」で暗示されている。

拙稿において、訴訟のための旅路に見られる「橋」という景物を論じた際、「橋」には渡河の不安定性が繰り返し付与されている事に触れた。⁴⁹ 人的交流に支障と困難をきたす「滞在記」の状況は、「路次の記」によって既に予告されていると考えられる。都における文化的コネクションを誇示する道具として「文」や「歌」を捉える事もできるかもしれないが、手紙による交流は、遅延・停滞を伴うものである。「音信」は、必ずしも緊密なものではないと、『十六夜日記』本文中では語られているのである。⁵⁰

さらに、『十六夜日記』において語られる「鎌倉」という土地は、『海道記』や『東関紀行』で語られる具体的な「鎌倉」として語られず、海が近い鄙として断片的に語られる。そこには観念的な四季の情景しか与えられておらず、明確な情景は、都の人々

との「音信」、特に和歌による都主体の情景を用いた記述に見られる程度である。

『十六夜日記』の語りは、「鎌倉」での孤独な日々を、「音信」ある日々とすることでしか克服できないと婉曲に示す。都を思い返させる「音信」が断続的に出現することで、「鎌倉」は「都」から隔絶された鄙として語られる。

おそらく都の近辺にありながらも、老境の孤独から「姨捨」を思う『更級日記』とは異なり、『十六夜日記』は「鎌倉」という鄙で都の人々や子供たちと「音信」を交わさなければならぬことを語ることで、都との接点が少ない状況に身を投じざるを得なくなった老境の女の孤立を表現していると言える。

『うたたね』は、前半に恋愛と失恋、後半に出家・愛宕転居、そして遠江下向の記事を有する。これは『更級日記』に見られる物語への憧れを語る少女期の記事と、参籠に傾く婚姻前後の記事の構成と重なり得る。つまり、『うたたね』もまた、少女期の挫折と、その回復としての仏道修行を語る性格が認められないだろうか。

そして、『十六夜日記』における「女」は、『更級日記』における「孝標女」の老境——夫との死別を経て、東国内の一つ信濃国「更級」へ思いをよせてしまう孤独な心境——を意識した造形となっている。つまり、参詣・参籠が仏道修行として結実しない『うたたね』における「女」の造形は、『更級日記』における「孝標女」の姿と似通っていると考えられる。

『十六夜日記』は東海道の途上において『うたたね』の出来事

へ言及することで、若き日の悲嘆と仏道修行の失敗を思い返す。鎌倉下向は、夫の死を契機とする財産相続が原因であり、子供たちとも離れ離れとなってしまふ。孤独な未亡人の姿を語る点で、『更級日記』との類似性を見出せる。

そもそも、『更級日記』の構成の捉え方として、物語に傾倒していた十代と、物語でに励む二十代という対置関係が考えられる。『更級日記』の場合、少女期は物語への憧れであり、貴公子の出現を夢見る姿が覗える。対して後半部・婚姻前後では、京の周縁とも言える「東山」の訪問や「太秦」参籠、そして都から一時的に脱する旅となる「初瀬」詣でが語られる。

この対置の構図は、物思いに悩む若き日を語る『うたたね』の構成が『更級日記』の前半部として、亡夫の遺言を守ろうとする未亡人の姿を語る『十六夜日記』の構成が『更級』後半部として、それぞれ対応している。

血族の訪れも少ないと語られる、孤独な「孝標女」の老境と、鎌倉滞在のために「音信」を交わす以外に都との接点が存在しない「阿仏尼」の姿から、両者の類似性が見出せないだろうか。『更級日記』の構成のうち、少女期に相当する箇所が、『うたたね』の構成であり、我が身を「嫉捨」になぞらえる孤独な老境に相当する箇所が、『十六夜日記』になると推測できないだろうか。『十六夜日記』は、『うたたね』を踏まえることで、未亡人となった自身の生涯を振り返えろうとする傾向があり、都の周縁である「西山」、「愛宕」、東国の「遠江」にも流浪した「女」の姿を再確認する性格も認められる。

こうした、『うたたね』を『十六夜日記』の前日譚と定位する語りの性格によって、『十六夜日記』は、失恋から懊悩していた『うたたね』の「女」が結果として『十六夜日記』で語られる「女」となってしまったと、作中主体を位置付けるのである。

恋人への執着故に仏道修行を疎かにした「女」は、その後、何の因果か、夫と子を得る事にはなった。しかし、夫に先立たれた結果、子供の財産相続問題に対処すべく東国に行かざるを得なくなってしまう。

子供とも、親しい人々とも別れ、都から遠ざかっていく鎌倉下向に際し、若き日に経験した、失恋に懊悩し何も得られずに都に戻ってしまう「遠江下向」へ言及する事で、鎌倉に向かった「女」は、行脚が失敗に終わってしまった若き日の自分に目を向ける。断続的ながらも自己の人生を回顧する事によって行われる、作中主体の定位は、自己の人生を内省し、現状を表現する日記的戦略の一種とも言える。

失恋という「共感者の喪失」に苦悩し、孤独の末、社会的要請としての「行ひ」を疎かにしてしまう『うたたね』の若き「女」の姿は、為す術なき世を生きる人物像の一つとして捉えられるかも知れない。そして、『十六夜日記』における訴訟は、『うたたね』に言及することで、『うたたね』における「女」の行脚の失敗という挫折と同様の状況に置かれていることを暗示しているのではないだろうか。

『うたたね』での出来事に言及する『十六夜日記』の特徴は、『うたたね』の作者比定の証拠として触れられることが多い。し

かし、『十六夜日記』は『うたたね』の経験語ることで、『うたたね』の「女」が、『十六夜日記』における日々を経験する事で、理想像を結ぶ物語と夢に翻弄された若き日々が、夫との死別によって潰え、その果てに「嬢捨」を引き合いに出す孤独な現状が出現するといった、『更級日記』の構成を想起させる。そこでは『更級日記』を踏まえる『十六夜日記』という、仮名日記の系譜を俯瞰する視座が重要となる。

『十六夜日記』に言及される『うたたね』もまた、旅をしても何も獲得できない「女」の姿を描く事で、現世における行為を頼みにしても、一向に報われない「女」の姿を表現した日記文学と考えられないだろうか。

最善ではないものの、ある程度は通用すると思われた建設的な手段が、解決の方法として機能しなくなる現状、自己の力だけでは到底解決できない不如意なる現世に翻弄されながら生きる人を語る事もまた、『うたたね』の語りの特徴の一つと位置付けられるだろう。

注

- (1) 「後家」としての阿仏尼については、馬如慧「中世女性日記文学における「家」意識について」北京日本学研究中心編『日本学研究』第277巻（2017・10）p392～408. が詳しい。馬氏は、『十六夜日記』冒頭で引き合いに出される『孝経』に着目して、作中主体である阿仏尼に息子の冷泉為相が歌道を継ぎ「立身行道」する事を望む姿勢がある事を指

摘している。

- (2) 福田秀一校注「十六夜日記」『中世日記紀行集』新日本古典文学大系51（岩波書店 1990）p280, 289. 作者の解説で、福田氏は『十六夜日記』は『うたたね』での経験を引き継いでいるとし、同一作者である根柢を再確認する。

- (3) 「うたたね」の遠江下向は「頃は神無月廿日余り」の出發であり、対して『十六夜日記』は「神無月十六日」の出發である。そのため、双方に見える出發の時節は概ね合致すると言える。

- (4) 今井卓爾監修、石原昭平・津本信博・西沢正史編集「女流日記文学講座」第六巻（勉誠出版 1990）p202～226.

- (5) 吉川秀雄『新訳十六夜日記精解』（精文館 1918）「作者」p16, 20. 本文は、津本信博編『日記文学研究叢書』第14巻（クレス出版 2007）より引用した。

- (6) 池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（至文堂 1965）第六章「十六夜日記」p208～213.

- (7) 比留間喬介校註『十六夜日記』新註国文学叢書53（講談社 1951）「うたたね解説」p29～30. 比留間氏は「うたたね」を偽作とした場合、その和歌の初句「これやさは」が、『続古今集』入集歌「さても我」と異なる事が問題であるとし、「阿佛が後に（『続古今』入集に際し）改めたものか、入集にあつて爲家が斧正を加へたものか、いづれかでなければいけない」と論じる。また、『十六夜日記』の「宮路山」において「この山までは昔見し心ちするに」と記される箇所

は、「うたたね」の旅で下つた道とは別で」あり、中世海道特有の変遷する路線の特徴が表れていることから、「うたたね」と『十六夜日記』の両作には「隠微な聯繫」があるとしている。

- (8) 次田香澄『うたたね 全訳注』講談社学術文庫（講談社 1978）。『うたたね』と『十六夜日記』に見られる語句の傾向についても同掲書が詳しい。字句の類似性に着目して、阿仏尼の作であると推測している。

- (9) 『新編国歌大観』編集委員会編『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編 歌集』（角川書店 1982）p237。『続古今和歌集 卷十 羈旅歌 九三三番』詞書「おもふこと侍りけるころ、父平度繁とほたあふみのくににまかれりけるに、心ならずともなひて、なるみのうらをすぐとてよみ侍りける 安嘉門院右衛門佐」。

- (10) 村田紀子「『うたたね』の古典摂取の方法——巻末の述懐を読み解く」『国文学研究』通号112（早稲田大学国文学会 1994・3）p80～88。

- (11) 今関敏子「阿仏における旅の造型：『うたたね』の流浪」『日本文学』第51巻 第6号（日本文学協会 2002）p9～28。

- (12) 『うたたね』の物語性については、同注5、『女流日記文学講座』第六巻に収録されている、渡辺静子「うたたね」における古典摂取の方法」が詳しい。

- (13) 福田秀一校注「うたたね」『中世日記紀行集』新日本古典文

学大系51（岩波書店1990）p171～177。

- (14) 玉上琢彌著『源氏物語評釈 第二巻』（角川書店 1965）p302。

- (15) 中野幸一訳『正訳 源氏物語 本文対照 第二冊』（勉誠出版 2016）p156。

- (16) 『古今和歌集』卷第十二「恋歌二」の巻頭三首は、小沢正夫・松田成穂校注・訳『古今和歌集』新編日本古典文学全集11（小学館 1994）p223より引用した。

- (17) 鈴木健一「古典文学の夢」『文学』第6巻 第5号 9～10月号（岩波書店 2005）p104～111。

- (18) 劉小俊「『うたたね』の夢」岡山大学文学部国語国文学研究室編『岡大國文論稿』第20号（1992・3）p9～16。

- (19) 今関敏子「『うたたね』における「夢」——時空認識と虚構——」『日記文学研究会 編『日記文学研究誌』第9巻（日記文学研究会 2007）p45。

- (20) 菊池靖彦校注・訳『土佐日記』新編日本古典文学全集13（小学館 1965）p55。

- (21) 朽尾武校注『玉造小町子壮衰書』岩波文庫 黄9-1（岩波書店 1994）朽尾氏は「平安時代中期ないしは末期に成立」と紹介する。『無名草紙』（小学館『新編日本古典文学全集』40は、p385。において「建久七年（1196）以降——中略——建仁二年（1202）までの間」を大まかな成立時期とする）に見られる女性評の件では、「小町」の晩年の姿が語られている。おそらく『玉造小町』は『無名草紙』

成立より前と推測される。『うたたね』と『十六夜日記』は、こうした零落した小町像を變形させる事で、「女」の置かれる不如意な境遇の表現方法として用いていると言えるだろう。

- (22) 同注21、同書 p50.
(23) 同注18、劉小俊「『うたたね』の夢」『岡大國文論稿』第20号 (1962・3) p15.
(24) 同注16、『古今和歌集』卷第十八「雜歌下」938「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」小沢正夫・松田成穂校注・訳『古今和歌集』新編日本古典文学全集11 (小学館 1994) p356.
(25) 同注8、次田香澄『うたたね』講談社学術文庫 (講談社 1978) p25.
(26) 福井貞助校注・訳『伊勢物語』新編日本古典文学全集12 (小学館 1994) p120.「第九段 東下り」。
(27) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義・Yūki Aokiほか「名編」『角川古語大辞典 第五卷 ひーん』(角川書店 1999年) p364.【宵居^{よゐ}】の項目。
(28) 同注8、同書 p77.漢文は「この世には一も堅固常住なものはない。水のしぶき・あわ・かげろうのようなものである」の意。
(29) 犬養廉校注・訳『更級日記』新編日本古典文学全集 26 (小学館 1994年) p298.299.「頭注十七」によると、女人の成仏を説くのは『法華経』第五卷であり、少なくとも

も、『更級日記』執筆時に、当該の巻は「尊ばれていた」という。そうした『法華経』の一節を引く、『うたたね』の語りに、女人成仏への関心を見出す事ができるのではないだろうか。だからこそ、恋人との未練を捨て去ろうと躍起になるのであろう。

- (30) 同注8、同書 p31.
(31) 同注8、同書 p28~30.
(32) 同注8、同書 p122.「しのばぬ人」は「自分を思い出してもくれない冷たい愛人」を指すとしている。
(33) 同注8、同書 p122.次田氏は『うたたね』最後の和歌を「作品全篇を閉じるに当たっての阿仏の述懐」とみている。
(34) 今関敏子「『うたたね』における「夢」——時空認識と虚構——」『日記文学研究会編『日記文学研究誌』第9巻 (日記文学研究会 2007) p22.
(35) 同注26、福井貞助校注・訳『伊勢物語』新編日本古典文学全集12 (小学館 1994) p123.
(36) 同注8、次田香澄『うたたね 全訳注』(講談社 1978) p122.次田氏は末尾の和歌を「阿仏の述懐であり、愛人に対する最後の哀切な感情と自嘲がこめられ」た歌と捉え、「自己の悲しみを、ともかくも客観化して形にすることにより作者はかろうじてその苦悩から脱出し、ふたたび新しく生きる決心をつけた」事を表していると解説する。
(37) 同注13、福田秀一校注『うたたね』p159.「かつうは」は「かつは」の転とされる。

(38) 同注8、同書p.55. その後の「女」の行動について、次田氏は「恋に懊悩する彼女は、じっと住まいに落ち着けず、これからしばしば転地・漂泊を試みる」ようになると解説する。

(39) 同注13、同書p.166. 「ひとひに」は「ひとへに」の訛とされる。

(40) 同注8、同書p.62, 63.

(41) 同注8、同書p.62.

(42) 大曾根章介・久保田淳校注『海道記』新編日本古典文学大系51(岩波書店 1960) p70, 124. 『海道記』の末尾は「愚懷ノ為ニ此ヲ記ス。他興ノ為ニ是ヲ書カズ」とある。語りの傾向として「仏道信仰のあり方を論じ」る性格があると、新編文学大系では解説されている。

(43) 大曾根章介・久保田淳校注『東関紀行』新編日本古典文学大系51(岩波書店 1990) p126, 152, 153. 『海道記』と比べて、『東関紀行』は「思想性や宗教性は希薄である」と評されている。実際、鎌倉の記事は、「鶴が岡の若宮」や、落慶直前の「阿弥陀仏の大仏」の遊覧が目立ち、末尾の和歌も、帰京に際して、鎌倉への「名残」を詠む内容となっている。

(44) 同注2、同書p.182, 183. 「深き契を結び置かれし細川(注：播磨国細川庄)の流れも、故なくせきとゞめられしかば、(中略)東の亀の鏡に映さば、曇らぬ影もや顕はるゝ」と考えて、「子を思ふ心の闇」を持つ「女」は、東国(鎌倉)への旅を決意する。しかし、これに続く「路次の記」、「鎌倉滞在記」において、こうした訴訟に臨む態度は希薄であり、荘

園の話題はおろか、「亀鑑」など鎌倉幕府に関連する話題すら出現しない。

(45) 『十六夜日記』の都における「女」の立場は「鎌倉滞在記」に見える消息のやり取り、特に京極家の「大宮院権中納言の君(京極為子と推定される)」との贈答歌から視える。為相についても、和歌五十首に点を付ける行為の記述から、歌道家の正統を継いだ後家としての役割が描かれている。

(46) 拙稿『十六夜日記』「路次の記」の表現——「富士」と「橋」に注目して——『湘南文学』第57号(東海大学日本文学会 2022・3) p139. 中世紀行文には、「富士」の和歌を示す前後の散文上に、具体的な地名を記す傾向がある一方で、『十六夜日記』に見られる「富士」の情景描写などには、こうした具体的な地名・歌枕を伴わない表現が散見されることから、「富士」周辺表現の醜化が捉えられると考え、『十六夜日記』には紀行文とは異なる性格が認められると指摘した。

(47) 田淵句美子著『人物叢書 阿仏尼』(吉川弘文館 2009) p108.

(48) 同注47、同書p.88.

(49) 同注46、同書p.35~158. 拙稿では頂の雪が残る「富士」に見られる不変性への態度を見出し得るほか、「路次の記」における「橋」の記述に「危う」き様子が与えられていると指摘した。特に「橋」については、『更級日記』に見られる「断橋」の風景と関連付けられる。屈折した「渡橋」の記述

からは「勢多の橋」の不在の延長上にあることから、永統性への不審が考えられると論じた。

同注2、同書p204.「鎌倉滞在記」最後の段では「(弘安三年)夏の程は、あやしきまで音信^{ひとがた}も絶えて、おぼつかなさも一方ならず。都の方は、志賀の浦浪立ち、山(比叡山)・三井寺の騒ぎなど聞ゆるも、いと^いおぼつかなし。からうして八月二日」になって、都からの手紙が届いたと語られている。「(弘安二年)冬」、「(弘安三年)春」と続いて、「同年夏」も手紙による交流が語られていくが、末尾に近い箇所における、この表現は、「音信」が「おぼつかない」ものであることを印象付けるためであると考えられる。

(おおば・ひろ 本学大学院2022年度修了生)